

グリット (Grit) の規定因についての探索的検討

—半構造化面接を通じて—

澤海 崇文^{1,2} 稲垣 勉^{1,3} 澄川 采加^{1,4}

¹ 教育テスト研究センター ² 流通経済大学 ³ 京都外国語大学 ⁴ 泉台小学校

グリットとは非認知能力の一つであり、将来の成功をもたらすといわれているが、何がグリットを育むのかという点に関して明確な結論は未だ出されていない。本研究ではグリットの規定因についてのヒントを得るため、6名の大学生を対象にグリットの測定および半構造化面接を実施した。グリットの測定にあたっては、自己報告法による回答および間接的な測定法による回答の二種を行った。面接では、中学3年生から高校3年生までの間に比較的長く継続していた活動、生活習慣、学習習慣などを聴取した。その結果、始めた理由は何であれどのような活動でも長く続けてみることで、挫折経験からの立ち直りが重要であること、部活の部長や主将といった立場がグリットを醸成することが示唆された。

キーワード：グリット、規定因、潜在連合テスト、半構造化面接、探索的検討

1. はじめに

グリット (Grit) は、心理学においては Duckworth が学術的研究の先陣を切ったとされ、「情熱」と「粘り強さ」の二つの要因から構成されるという。グリットを測定する尺度は Duckworth, Peterson, Matthews, & Kelly (2007) によって開発され、12項目より構成される。この尺度が考案されて以後、グリットと関連する変数は何か、グリットはどのような結果をもたらすのか、といった観点から研究が進んできた。グリットと関連するものとして、学業成績、陸軍士官学校での退学率の低さ、スペリングコンテストでの良い成績 (Duckworth et al., 2007) など目に見える成功と結びつくこともあれば、ポジティブ感情や人生満足感 (Singh & Jha, 2008)、仕事に対しての積極的な関与 (Suzuki, Tamesue, Asahi, & Ishikawa, 2015)、対人援助職でのバーンアウト症状への抑制効果 (井川・中西, 2019) など、直接視覚化できないが望ましい帰結をもたらすことも示されている。

しかし、先行研究はグリットの規定因に関してあまり検討していない。一つ挙げると、子供の頃の親の養育スタイルがグリットに影響するという (Howard, Nicholson, & Chesnut, 2019)。具体的には、親の受容的な養育態度、積極的に関与する養育方針はグリットにポジティブに影響するのに対し、ヘリコプターペアレントのような過保護な養育スタイルはグリットにネガティブに影響するということが示されている。特に本邦においてはグリットの規定因を明らかにした研究は、著者の調べた限り行われていない。

そこで本研究は、大学生を対象とし、中学校と高校での活動や生活習慣などを調査し、グリットの規定因を探索的に調べていくこととする。グリットの測定の際、自分で意識して回答できるグリット (i.e., 顕在的グリット) に加え、自分では意識できないグリット (i.e., 潜在的グリット) の存在を仮定し、間接的な測定法も併せて実施する。

2. 方法

2.1 参加者 6名の大学生 (男性4名, 女性2名) が本研究に参加した。

2.2 事前測定項目 顕在的グリットの測定のため、興味の一貫性を測定する6項目および努力の粘り強さを測定する6項目から構成されるグリット尺度 (Duckworth et al., 2007) の日本語版 (竹橋・樋口・尾崎・渡辺・豊沢, 2019) を使用し、5件法で回答を求めた。さらに、潜在的グリットの測定のため、潜在連合テスト (稲垣・澤海・澄川・相川, 2020) を使用した。

2.3 手続き 上記項目への回答を終えた者に対し、第1, 第2著者が半構造化面接を1対1で、オンライン会議ツール上で実施した。簡易版グリット Grid (櫻井・渡辺, 2018) を参考に中学3年生から高校3年生までの4年間で、学校の授業以外に長く打ち込んだ活動を尋ねた。各活動について、実績や役職の経験も併せて尋ねた。その後、同じ期間の生活習慣、学習習慣、アルバイトやボランティアなどその他の活動を続けていたかも尋ねた。

3. 結果および考察

3.1 各グリット得点化と高低判断 顕在的グリットについて、反転処理が必要な項目は反転処理を施し、興味の一貫性および努力の粘り強さの各下位尺度得点を相加平均にて算出した。潜在的グリットについてはD得点 (Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003) を算出して潜在的シャイネスの得点とした。

顕在的グリットの高低について、各下位尺度得点の竹橋他 (2019) の平均値から標準偏差1つ分の増減に閾値を設定し、得点はその範囲内に収まった参加者を中程度と判断し、得点はその上側閾値より高かった者、下側閾値より低かった者をそれぞれ高群、低群と判断した。潜在的グリットの高低については初の試みであるため、6名の中で値を比較して高低を判断した。以上の判断をまとめると表1のようになる。

表1 顕在的・潜在的グリットの高低

ID	顕在的興味	顕在的努力	潜在的興味	潜在的努力
1	高	高	中	低
2	中	中	低	低
3	中	中	高	高
4	中	中	中	中
5	中	高	中	高
6	中	低	中	高

3.2 課外活動 今回の参加者の中で最も高いグリット得点を尺度にて示したID1の学生は、一つの運動競技を子供の頃から続けており、部活の主将を経験していたことや、挫折経験を語ってくれた。次に高いグリット得点を示したID5の学生も運動競技の主将であったこと、さらに、それ以外の課外活動にも積極的に取り組んでいたという。一方で、尺度上のグリット得点が比較的低かったID6の学生は、一つの運動競技を続けていたものの、特に役職には就かずにいた。グリット尺度得点の中程度のID4の学生は同級生の影響で運動競技を始め、先発メンバーに選ばれることも多くなったが、途中で先発を外されるという挫折を経験しながらも、そこで落胆せずに考え方を変え、競技を辞めるのを思いとどまってやり続けたという。ここから推測されるのは、尺度にて測定されるグリットが中程度、高い者に共通する点として、主将や部長といった何らかの役職に就いていたこと、また、挫折経験のような困難な場面に直面してもそれを乗り越えていたということであろう。

3.3 生活習慣 遅刻や欠席に関して、ID2(潜在的グリット低)の学生のみが月に数回あり、他の学生は全員、自己責任による遅刻と欠席はなかった。学校を休みたくても親に言

われて行くことになっていたという意見もあった (ID5, 顕在的・潜在的グリット中から高程度)。グリットを成長させる要因として、規則正しい生活を続け、いかなる理由であれ (e.g., 誰かに言われてそうした) 何かの活動を長く続けることが肝要であると示唆された。

3.4 学習習慣 6名とも大学入学試験に成功して今の大学の学生になっているため、学習習慣は比較的定着しているように見受けられた。学習を妨げる携帯や SNS を受験勉強期間中には絶っていたという意見が多く見受けられた (ID2, ID3, ID4)。

3.5 その他の活動 アルバイトに関しては ID1, ID2 の学生が関わっていたが、校則で禁止されているケースもあり、単純に他の学生との比較は難しい。ボランティアについても義務のため取り組んでいた (ID6) という事情もあり、これ以上の推測をするのは難しい。

3.6 まとめと今後の展望 本研究はグリットの規定因を探索的に検討するため、半構造化面接を大学生 6 名に対して実施した。その結果、グリットを育成するためには、まず、その活動を始める理由は何であれ、長く続けることが重要だと示唆された。また、挫折経験に打ちひしがれそうになっても、そこで諦めずに、考え方を変えて再チャレンジして長く続けることも大事だと思われる。また、部長や主将といったリーダーの立場を引き受けて一定期間続けることもグリットに影響するものと考えられる。今後は、このような推測が妥当かどうかを縦断的研究によって明らかにする必要があるだろう。

ただし、本研究は以下の制約を伴う。一つに、今回の面接研究で本心を聞けていない可能性が挙げられる。面接を担当したのは各学生の担当教員であり、学生が社会的に望ましい回答をした可能性は否めない。もう一つは、参加者全員がそもそも大学入学試験を乗り越えた人たちであり、グリットが本当に低い人がリクルートされていなかった点である。低グリット者はそもそも研究依頼を行っても応諾率が低い可能性があり、今後は低グリット者に対してもリクルートが成功するような手立てを講じた上で、彼ら彼女らの過去経験を深く見ていく必要がある。

4. 参考文献

- Duckworth, A. L., Peterson, C., Matthews, M. D., & Kelly, D. R. (2007) Grit: Perseverance and passion for long-term goals, *Journal of Personality and Social Psychology*, 92:1087–1101
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003) Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm, *Journal of Personality and Social Psychology*, 85:197–216
- Howard, J. M., Nicholson, B. C., & Chesnut, S. R. (2019) Relationships between positive parenting, overparenting, grit, and academic success, *Journal of College Student Development*, 60:189–202
- 稲垣 勉・澤海崇文・澄川采加・相川 充 (2020) Grit を測定する Single Target-Implicit Association Test の作成の試み, 教育テスト研究センター年報, 5:53–55
- 井川純一・中西大輔 (2019) 対人援助職のグリット (Grit) とバーンアウト傾向及び社会的地位の関係—高グリット者はバーンアウトしにくいのか?, パーソナリティ研究, 27:210–220
- 櫻井良祐・渡辺 匠 (2018) やり抜く力は入学者選抜に応用可能か?—簡易版 Grit Grid を用いた客観的な Grit 測定の試み—, 大学情報・機関調査研究集会論文集, 7:32–37
- Singh, K., & Jha, S. D. (2008) Positive and negative affect, and grit as predictors of happiness and life satisfaction, *Journal of the Indian Academy of Applied Psychology*, 34:40–45
- Suzuki, Y., Tamesue, D., Asahi, K., & Ishikawa, Y. (2015) Grit and work engagement: A cross-sectional study, *PLoS ONE*, 10:e0137501
- 竹橋洋毅・樋口 収・尾崎由佳・渡辺 匠・豊沢純子 (2019) 日本語版グリット尺度の作成および信頼性・妥当性の検討, 心理学研究, 89:580–590
- 5. 謝辞** 本研究は元筑波大学教授の相川充氏の指導を受けた。ここに記して御礼申し上げる。

